

ビデオ 通信

2020年
5月14日(木)
No.4374

月・木曜日発行
1ヶ月¥11,000(税別)
発行：飯澤剛 編集：齋藤浩一

ユニ通信社

〒106-0047
東京都港区南麻布5-2-37
DEPECHE MODE 4F
TEL：03-5422-7515
FAX：03-5422-7516
E-mail：vt@uni-press.net

ヴェルト

「リモートプレビュー」サービスを提供

テロップ業務のテレワーク／遠隔地からのチェックなどに活用
ポストプロの“3密”問題解消に向け



「リモートプレビュー」サービスを活用することで、ヴェルト 汐留ビデオセンターの編集室(左)で作成されているテロップを、遠隔地にいるディレクター(右)がリアルタイムにチェックできる

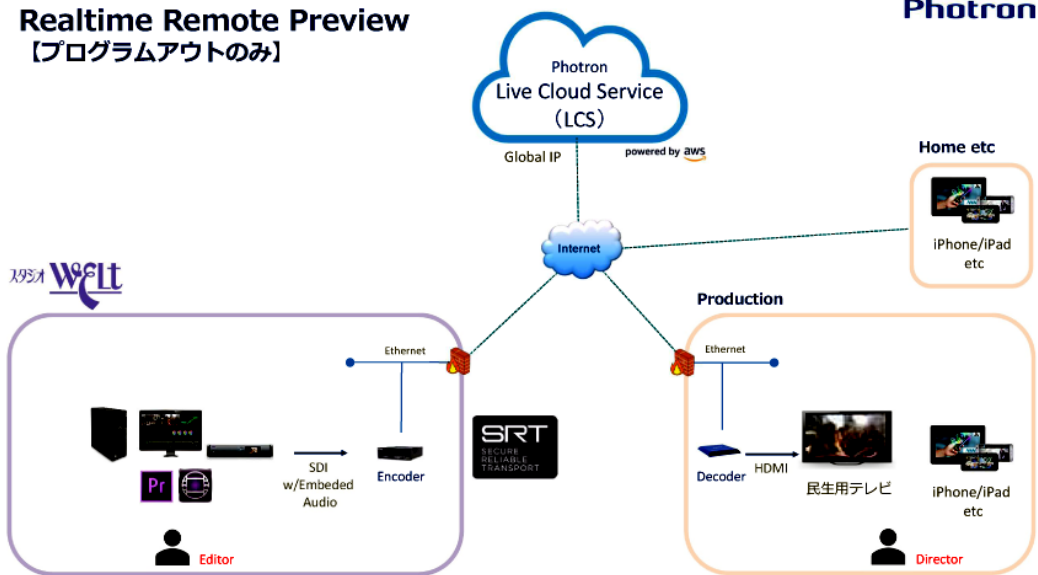
ヴェルト(株)が、「リモートプレビュー」のサービス開始に向けて試験運用を展開している。同サービスは、(株)フォトロン 映像システム事業本部の「Photron Live Cloud Service (LCS)」を活用したもので、HD-SDIなどの映像・音声を、インターネットを介して高画質・低遅延で伝送し、スマートフォン、タブレット端末および大型モニターなどでプレビューすることができるシステムとなっている。ヴェルトでは、同システムを3セット導入し、レギュラー番組における編集業務のテレワークや遠隔地からのチェック等に活用しているほか、新型コロナウイルス問題に対するポストプロダクション業務における“3密”の解決策の1つとなる取り組みとして、同システムの活用を提案していく。

Photron Live Cloud Service を活用

「リモートプレビュー」システムは、HD-SDI エンコーダー(編集室側)、HDMI デコーダー(プレビュー側)とAWS(アマゾン ウェブ サービス)を活用した「Photron Live Cloud Service」で構成。映像・音声をHEVCやH.265にエンコードし、ストリーミングする。インターネット越しでも低遅延で画像の乱れを最低限に抑えることができる。音声はAES128/AES256暗号化に対応。

専用アプリ「HAIVISION Play」「HAIVISION Play Pro」を使うことでスマートフォンやタブレット端末でプレビューすることができるほか、ストリーミングを受ける側のデコーダーでHDMI

Realtime Remote Preview 【プログラムアウトのみ】



出力ができるため、民生用テレビや大型モニターなどでのプレビューが可能で、細かなテロップの確認もできる。

なお、テレビ会議システムのような機能はないが、フォトロンでは、ディレクターの指示が画面以上に反映できる仕組みも検討されている。

他の場所でもテロップ作業ができないか

「リモートプレビュー」導入の経緯について、ヴェルト 代表取締役社長の安井純治氏は〈当社ではテロッパーにフォトロン「TFX-Artist」を使用していますが、「女性スタッフがテロップシステムの作業を編集室だけでなく他の場所でもできないか」と考えたのがきっかけです。理由の1つは、編集室の重い雰囲気になんて耐えきれず、辞めてしまった女性スタッフがいたこと。もう1つは、結婚して出産のために仕事を辞めてしまった女性スタッフが、育児期間を終えて他のパート等で働くなら、せっかく身につけた技術を使ってリモートでその業務ができないかと思ったことです。それによって労働力の確保ができれば、当社としても嬉しいことです。さらに、お客様が「どうしても編集室に行くことができない状況だが、様々な確認を取りたい」という要望がありました。例えば、顔を隠す「デフォーカス」作業で「もう少し消したい」「もっと濃く」「ここはもっと出したい」といった指示をワンカットごとにチェックしてもらう狙いもあり、フォトロンとともに検討と検証を進めました〉とする。

技術部 マネージャーの森田祐司氏は〈検証の結果、TFX-Artist を外部から操作することができることはわかったのですが、問題は動画での確認です。テロップのレイアウトやフォント、カラーなどについて口頭だけで指示するには無理があります。最初は静止画でも……と考えていましたが、カメラワーク等に合わせた効果的なテロップの配置、空きスペースなどの感覚は、やはり動画でなければわかりづらい。「リモートでテロップ制作や編集を行えるシステム」について検証し、カナダ「Teradici」のリモートシステムを活用することで、遅延をほとんどゼロにすることができました〉としている。

ポストプロダクションでも“3密”を避ける

「リモートプレビュー」システムのコスト面、コミュニケーション面などを含めて検討を進めている矢先、新型コロナウイルスの問題が発生したのを機に、本格的な導入を進めることになったという。

安井氏は〈「3密を避けるよう」との政府の大方針が出て、放送局側でも新型コロナ問題は長期化しそうだ予想しており、「ディレクターが編集室に入らずに作業ができる環境整備」に取り込みを進めようと考えています。当社の汐留ビデオセンターにほど近い日本テレビから「何か解決策があるようだが」と連絡をいただき、このシステムを説明したところ、高い関心を寄せていただき、デモを行い、画質も遅延も問題ないとの評価を得ました〉とし、同社では同システムを3セット発注、具体的に「どのようなサービスを展開していくか」を模索している最中だという。特に画像はH.265（HD相当）で伝送しており、完パケに近い高画質の映像がディレクターのスマートフォンやタブレット、パソコンだけでなく、大型モニターに映し出すこともでき、小さいテロップの確認も可能である点が高く評価されている。

同社では、これまでに複数の番組でテストを行っている。ディレクターからは様々な意見もあるものの、放送局の担当者からは「編集室には行けないのだから、全く同じようにできないのはわかっている。逆に、このシステムをベースに、どのようなルールの下で作業するか。制作側とポストプロダクション側における運用方法次第」との評価で、その点を改めて確認しているところだという。

森田氏は〈編集室に行かず、ディレクター、アシスタントディレクター、ポストプロダクションの三者が完全に離れている状態で1つの番組を完全に仕上げるシミュレーションを行っています。これができる状況を作り出せば、今回のような緊急対応も含め、様々な使い方ができるのではないかと考えています。とにかく「近いんだから行って話した方が早い！」といった感触を払拭させるためのシステムだと考えています〉としている。



森田祐司氏

従来の働き方を見直す機会に

「リモートプレビュー」システムが浸透していくことで、今後のポストプロダクション業界はどのように変化していくのか。

安井氏は〈新型コロナ対策としても、いわゆる“3密”の状態はかなり改善できます。現状は編集室の映像をお客様に送るというシステムなので、編集室自体は使用しますが、ゆくゆくはノンリニア編集において、オペレーターも自宅からリモートで作業するようなことも可能ではないかと考えています〉とし、同社ではまず、汐留ビデオセンターにおける「リモートプレビュー」のサービス体制を充実させていく方針だ。

森田氏は〈このシステムは、制作側とポストプロダクション側の間でコミュニケーションが容易に取れている状態かつスピードが求められる業務に、かなりの効果が見込めると考えています。レギュラー番組では現状でも、ある程度“お任せ”で業務を進めている部分もあるので、「リモートプレビュー」はしやすいのではないかと思います。「映像を常に見ていたい」「他の番組の原稿を書いているので、2時間後に上がったところでまとめて見たい」など、ディレクターによって要望は様々ですが、それは編集室内で一緒に作業をしている時と同じこと。ただ、別の空間にいますからしっかりと「意思の疎通」が必要で、普段からの信頼関係が重要です。作業スケジュールなど



安井純治氏

については、単なる口頭でのコミュニケーションだけでなく、資料としてキチンと残しておくようなカタチに改善していく必要もあると考えています」とする。

「リモートプレビュー」導入が、ポストプロダクション業務について改めて見直すきっかけになることも期待しているという安井氏は、〈現在のような「スタジオの時間貸」ではなく、1つのプロジェクトに対して時間やスタッフを集中して業務を進めることで全体のコストや納期、クオリティを上げることができる。ポストプロダクションの生産性が上がることは、放送局側にも大きなメリットがあることだと考えています〉と話している。

◇ヴェルト <http://www.welt.co.jp/>